

凝集反応用培地としても使用できる。

分離菌株98株中、Dextran, Sucrose のいずれでも凝集を起こすもの89株、そのいずれでも凝集しないもの3株、Sucrose のみで起こすもの5株 Dextran のみで起こすもの1株があった。

また、これらの菌株の固着能を比較してみると凝集能欠損株においても、かなり強い固着能を示し、凝集能が強い菌株でも固着能が弱いものも認められた。このような現象から、Dextran に対する cell-receptor の欠如、cell-associated GTF 活性の低下もしくは欠如、または、固着能と凝集能に関与する cell-receptor の違いなどが考えられる。実験的変異株においては、このような例も報告されているが、分離菌株ではまだ報告されていない。今後これらの分離菌株について、う蝕原性、その他の性状について更に検討を加えて行きたい。

追 加：佐々木 市 郎（口腔微生物）

1. 菌株間の相違と云う点はスライドのように確かにあると思われるが、選択性的みに今回は着目して実験している。
2. 選択培地間のコロニー出現率をみるとときには、血液寒天と云った完全培地上でのコロニー数を1として、平板効率として表現するとわかり易い。

演題8 解剖遺体の静脈系で見出された、きわめて稀な異常について

○大 沢 徳 二, 高 木 知 道**, 野 坂 洋 一 郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座**

本年度の歯学部解剖実習遺体にきわめて稀な静脈系の異常（上大静脈と下大静脈の重複）をみとめたので報告する。

本例の遺体は71才の女性で、死因は脳硬塞と記されている。

上大静脈のみ、あるいは下大静脈のみの重複はこれまで多くの報告があり、本邦ではそれぞれ33例、60例を数えるが、上大静脈と下大静脈の重複は本例が世界で初めてではないかと思われる。

心臓の重量は 440g であった。左の内頸静脈は左の鎖骨下静脈と合流して左の上大静脈を形成し、冠状静脈に流れこんでいる。これは左の前主静脈の残存によ

ってできたものであると思われる。左右の鎖骨下静脈は細い静脈（φ 2mm）によって交通されている。

また左の下大静脈が存在し、しかもこれは右の下大静脈よりも太い。これは左の上主静脈の残存であると思われる。このことは、一般的に右側が残り左側が退化する傾向があることに反している。

なお、心臓の内部には異常はなく、その他の脈管系にもめだつた異常は見いだされなかった。脈管系以外では巨大S状結腸をみとめている。本例は71才で死亡した例であるので、この重複した上大静脈と下大静脈は機能的には一応充分の働きをしていたものと思われる。

演題9 顆粒細胞型エナメル上皮腫の電顕的検討

○野 田 三 重 子, 島 山 節 子, 竹 下 信 義,
鈴 木 鍾 美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

顆粒細胞型エナメル上皮腫の微細構造についてはいままて3例の報告があるにすぎず、顆粒の本態については、議論が分かれており2例は lysosome であるとし、1例は mitochondria と報告している。

今回我々は、WHOの分類による濾胞型、顆粒細胞型、一部に棘細胞型の混合している1例について電顕的に検索し、顆粒細胞の本態について少しく知見を得たので報告する。

症例は49才女性で前歯部下顎骨に腫瘍が認められた。離断した下顎骨の一部を電顕試料とし、他を光顕用標本とした。

組織化学的所見は、光顕的には腫瘍細胞は顎骨内に島状、濾胞状に増殖し一部に嚢胞形成がみられた。基底部の細胞は高円柱状、類円形あるいは円形で、細胞質が膨化しエオジン好酸性の顆粒が充満して、核は内層の方に偏在している。このような腫瘍細胞の顆粒状変化は特に基底層に多くみられるが、一部には内層にもみられた。また内層には一部に扁平上皮化生している部分がみられた。

顆粒細胞の細胞質は好酸性で、PAS弱陽性、銀染でグレー、TB (PH 2.5, 4.1, 7.0) でメタクロマジー陰性、Al-BI, PTAH も陰性であった。

電顕的に基底層の細胞は細胞質に電子密度の高い顆粒が充満していた。顆粒は直径平均 0.6μ程度で限界